



園だより 10月

令和8年10月3日

学校法人 南陽学園
宮内認定こども園

2026年度 年主題「しゅイエスとともに」

たくさんの恵みの中で、豊かな交わりを楽しみましょう

園長 宇津木 純子

先月は、祖父母の皆さまにはご多忙のなかお越しいただき、参観や子どもたちと一緒にたくさん遊んで楽しい時間を過ごすことができました。誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

厳しい残暑もようやく和らぎ、コスモスやススキが心地よい風に優しく揺れ、たわわに実った柿がきれいに色づき始めました。稲刈りも天候に恵まれて、刈り取りが終わった田んぼと黄金色に輝いている、未刈りの稲穂が織りなす模様は、なんと美しいことでしょう。あつという間に秋が深まりました。子どもたちは、虫取り網や虫かごをもってトンボやコオロギやバッタ探しに夢中です。そんななか、2日ほど前に、鳴き声が聴こえなくなったと思っていたアブラゼミが1匹一生懸命鳴いているのが聴こえてきました。「10月のセミ！！」驚くと同時に、この生命力に感激しました。

天気の良い日は、熊野大社や双松公園、園舎まわりのお気に入りの散歩コースを楽しんでいます。途中でいろいろな草花や木の実を見つけては、大事そうに持ち帰ってきます。園の畑のでは、収穫を待っているサツマイモや里芋の様子、先月種をまいた大根やカブの成長も楽しみに観察しています。こうして、夏から秋への移り変わりを感じながら、子どもたちはたくさんワクワクや不思議をみつけ、刺激がいっぱいのこの時期を楽しんでいます。興味や関心を広げながら、安心できる環境のなかで、「やりたいな！」「やってみようかな！！」と、迷いながらも1歩ずつ自分で踏み出せる力が育ってきているのを感じています。本当に豊かで楽しい季節です。

今週は、保護者の皆さまと一緒にゲームや運動を楽しむ「3.4.5歳児のわくわくの日」が予定されています。一緒にどんなことをして楽しみたいかを話し合い、計画を練っているようです。子どもたちの笑顔あれる万国旗も各部屋に飾られ、当日がとても楽しみです。

今月は、第58回友愛セールへのご協力や、教員研修会参加に伴う家庭保育のご協力など、さまざまな行事へのご理解、ご支援をいただき、心より感謝申し上げます。豊かな自然の恵みや変化を五感で楽しめる季節です。子どもたち、保護者の皆様、そして教職員一同、神さまの恵みとたくさんの喜びを感じながら、この楽しい幸せな時間と豊かな経験を大切にしながら、過ごして参りたいと思います。



<10月聖句>

ローマの信徒への手紙 12：15「喜ぶ人とともに喜び、泣く人と共に泣きなさい」

宮内教会 代務者 関岡 登季弥牧師

日々の家事にお仕事、そして子育てと、保護者の皆様、毎日、本当にお疲れ様です。私たちは普段、「子どもたちのために」「家族のために」と、無意識のうちに自分の気持ちや疲れに蓋をして頑張りすぎてしまうことがあります。その際に、「人に心配をかけちゃいけない」「自分がしっかりしなきゃ」と、心の中に小さな痛みや割り切れない思いを抱え込んでしまうことはありませんか？先日、こんな話を聞きました。長年連れ添った奥様を亡くされたある男性が教会に通うようになりました。最初は悲しみに暮れていたその方は、礼拝のあとのお茶の時間などに、少しずつ、少しずつ、自分の思いを言葉にして吐き出していました。そうやって、心の中に溜まっていた悲しみを分かち合うことで、その方の心は少しずつ癒やされていったんだそうです。この様に、人は、心の奥底にある本当の思いを「安心して話せる場所」があるだけで、ふっと心が軽くなることがあります。別に無理に前向きにならなくてもいいのです。うまく話せなくてもいいのです。ただここなら自分の弱さを出しても大丈夫なんだと、そう思える場所や関係性が、誰にとっても必要なんだとその様に教えられました。

聖書の中には「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という言葉があります。もちろん、当事者ではない私たちが、他人の気持ちを完全に理解することは出来ません。しかし、ただ傍らに寄り添い、お互いの思いをそのまま聴き合うことはできます。私たちのこども園が、子どもたちにとって楽しい場所であることはもちろんですが、保護者の皆様にとっても、そんなほっと一息ついて「心を落ち着ける場所」であればと願っています。送迎時のちょっとした立ち話でも、連絡帳でも構いません。嬉しかったこと、困っていること、ちょっと心が疲れたなと感じることなど。どうぞそのままの気持ちをお聞かせください。完璧なアドバイスはできないかもしれませんが、私たちはいつでも皆様の言葉に静かに耳を傾け、共に歩んでいきたいと思っていますので、肩の力を抜いて、いつでもお声がけください。

乳幼児期から始める「便育」について

園に毎月届く、「私幼時報 10月号」で、「便育」についてのコラムがありました。私にとって、初めて聞く言葉でしたが、「食育」があるように「便育」もあるということに納得。「日本うんこ文化学会」もあり、便とその関連する知識や情報を知ることが出来ることも知りましたので、ご紹介します。

食べたら、出る。これは生きている証です。大人は「うんち」という言葉を口にするのをためらってしまいますが、幼児期の子どもたちにとっては、排便はとても身近な出来事ですし、食事や睡眠と同じように、子どもの健康を支える大切な営みです。「学校ではトイレに行きたくない！」「学校で、大便をしたくない！」とがまんする子どもが見られるとも聞いたこともあります。うんちを通して身体を知り、自分の身体の変化に気づき、自分の健康を大切にする力を育むことが「便育」です。それは、乳幼児期から始まっています。

園や家庭で、「今日はうんちが出た？」「どんなうんちだった？」と自然に話せる環境があるだけでも、子どもたちの身体への関心は高まります。排便の回数は個人差があるので、毎日でなくてもバナナのようなうんちが気持ちよく出ているれば大丈夫。硬くないか、痛みはないか、すっきりしているかなど、子どもと「気持ちよく出す感覚」に目を向けることが大切です。幼児は遊びに夢中になって便意を我慢したり、トイレに行けず、カーテンの後ろや、すみっこで気張っていることがあります。便意を繰り返し我慢すると、便が硬くなり、排便時の痛みにつながり、悪循環を生みます。だからこそ、園のトイレは「用を足す場所」ではなく「安心して身体を整える場所」であってほしいです。便の状態は子どもの生活を映す「からだのサイン」でもあります。小さな変化をきっかけに、生活を見直すこともできます。排便を「しつけ」の問題としてではなく「子どもの健康と一緒に見守るテーマ」として分かち合いましょ。う。大便(うんち)は大きな便り、小便(おしっこ)は小さな便り、そのメッセージに耳を傾けることは、子どもの健康だけでなく、自分の身体を大切にする力を育てることにつながります。子どもたちが、成長し大人になった時も気持ちよい排便が出来て「晴れ晴れすっきり」できるように乳幼児期の今「うんちの話をしていきたい」と改めて思いました。

(出典として「私幼時報令和8年10月号 日本うんこ文化学会 上席研究員 榊原千秋」)